

# 児童養護施設退所者が自立していく プロセスに関する研究

— 職員との関係性形成の視点から —

高 安 和 世

## 1 はじめに

児童養護施設では、中学卒業後に就職すると15歳で、高校に進学すると卒業時の18歳で、子どもたちは施設を出て自立しなければならない。つまり、子どもたち個々の状態にかかわらず、その年齢に達すると施設を出なければならない「強いられる自立」という状況が長く続いていた（青少年福祉センター 1989）。そのような中で、1997年の児童福祉法一部改正により、施設養護の基本理念が「保護」から「自立支援」へ転換された。

この児童福祉法改正を受けて、福島一雄（1998）は、これまでも児童養護施設は子どもの自立に取り組んできたが、その多くはアフターケアとしてなされていたのに対し、近年はその前段階のリービングケアの必要性が注目されるようになってきており、インケア、リービングケア、アフターケアという施設処遇の過程が体系化されてきたとしている<sup>1)</sup>。その10年ほど以前にリービングケアという概念を提唱した山縣文治（1989）は、リービングケアに必要な視点として、施設生活と社会生活との間の変化の調整、個別的なケアを組み立てていくためのケアマネジメント、地域社会の中での実践の3点をあげ、社会生活援助指標を生活技能の修得、就職過程の把握、社会資源の把握、社会儀礼等の修得としている（山縣 2012）。

一方、庄司順一（2007）は、自立支援は自立を目前にした時期に取り組むことではなく、乳幼児期からの育ちが重要であり、ケアのもとにいるすべての時期を通して自立の問題を考えなければならないとし、安定したアタッチメントの形成や基本的信頼感の獲得が自立の土台になるとしている。また、長谷川真人（2009）は、入所から施設生活の中で、社会生活を展望して取り組まれている自立支援として、生活指導、学習指導、金銭的管理の意識づけ、対人関係の支援、職業支援をあげている。

さらに、村井美紀（2002）は、自立とは「自分でやろうとする意欲＝主

体性」であると定義し、獲得させるためには子どもとの信頼関係を形成し、子どもが決断するまで待ち、その決断を尊重して子どもが失敗することから学ぶ過程を見守ることが必要であり、それら一連の行為が自立支援であるとしている。伊達直利 (2002) もまた、児童養護施設の子どもの自立にとってもっとも重視されることは子どもと職員との関係性であろうとし、櫻谷眞理子 (2014) は、自立生活を営むために必要なこととして、基本的な信頼感が獲得されていること、自ら判断して決定する力が育っていること、基本的な生活技術を身につけていることをあげている。

また、谷口純世 (2011) は、自立支援の取り組みについて各児童養護施設に郵送調査を行い、児童養護施設での自立支援が、自立を目前とした時期からのものであるという考え方と、生活全体が自立支援であるという考え方が混在しているとしている。だが、子どもが入所してからの生活すべてが将来の自立につながる営みであるという視点で、施設の養育を考えていくことが必要であろう。その中でも、村井 (2002)、伊達 (2002)、庄司 (2007)、櫻谷 (2014) がいうように、児童養護施設において子どもと職員との信頼関係を築くことが、子どもの自立の基盤となると考えられる。

さらに、庄司 (2007) は、ポウルビィやアンナ・フロイトを引用して継続的な関係が重要であるとし、基本的信頼感を持てるようにするために「児童養護施設においては、できるだけ担当者の交代を避けるべきであろう」(庄司 2007 : 235) と述べている。しかし、谷口 (2011) が行った調査では、担当する子どもがいる職員550名のうち担当は基本的に変わらないとする職員は101名 (18.4%) であった。また、玉井紀子・森田展彰・大谷保和 (2013) が行った中高生担当についての調査では、幼少時から担当を継続して中高生に至るという発想になりにくい状況がうかがわれる。つまり、児童養護施設の子どもの自立のために必要と考えられている支援と、実際になされている支援に解離が生じていると考えられる。児童養護施設では、退職や異動で継続的に同じ職員が個別的なケアを各児童に行う態勢を保つことが困難である (森田 2007) からである。

しかし、子どもたち自身は施設生活の中で、また退所後に生活していく上で、これら職員との信頼関係についての問題をどのように感じているのだろうか。児童養護施設退所者を対象とした実態調査は行われている (例えば、高橋ほか 2013 ; 永野・有村 2014 など) が、入所から退所後に自立

した生活を送るまでのスパンで、各々の退所者が自立していく現象（プロセス）を明らかにした研究は少ない。これらのプロセスを明らかにすることで、自立するために必要な職員と子どもとの関係性が見えてくるのではないかと考える。

そこで本稿では、児童養護施設退所後に自立した生活を送っている退所者に、インタビューを行うことで、児童養護施設退所者が自立していくプロセスを明らかにし、その実態を基に児童養護施設における自立支援のあり方を検討することを目的とする。

## 2 方法

### 2.1 対象

児童養護施設を自立に向けて退所するまで、3年以上入所しており、面接の時点で20歳以上の「社会に根ざして自立した生活を送っている児童養護施設退所者」を対象とした。本研究においては、次の4点に合致する児童養護施設退所者を「社会に根ざして自立した生活を送っている児童養護施設退所者」と定義した。

- ・仕事を継続している。あるいは、家庭の主婦としての役割を果たしている。
- ・経済的に安定している。
- ・困ったときに相談できる人がいることも含めて人間関係がうまくいっている。
- ・生活上の大きなトラブルをかかえていない。

3 児童養護施設の退所者のうちから、これらの条件に合致している退所者9名（男性7名、女性2名）に面接を依頼し了承を得た。20歳代6名、30歳代3名（平均年齢29歳）、最終学歴は中学卒業が4名（このうち高校進学後中途退学が1名、施設退所後自立援助ホームに1～2年在籍していた者が2名）、高校卒業が2名、専門学校卒業が3名であった。また、配偶者がいる者6名、子どもがいる者5名であった（子どもの数の平均2.2人）。施設入所期間は3～16年（平均10年）であった。

### 2.2 データの収集

2015年11月から2016年5月にかけて、半構造化面接を行った。児童養護施設の生活はどのようなものだったか、退所後の生活はどうだったかに

ついて、主に人間関係について自由に語ってもらった。面接時間は最長で98分、最短で45分、平均70分であった。得られたデータは逐語録に起こした。逐語録は全部でA4判(40×36)116頁になった。

### 2.3 データの分析方法

面接の逐語録を、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下2003)を用いて分析した。児童養護施設退所者の自立は、施設職員、親、施設内外の友人、学校の教師、地域の人々、退所してからの職場の人たち、あらたに持った家庭での配偶者や子どもたちとの相互作用的なやりとりの中で進められる。本研究はこのような人間と人間が直接的にやりとりをする社会的相互作用からなるプロセスをとらえ、その結果を実際に支援を行う際に参考となるような理論として生成することを目的としている。そのため、人間の相互作用にかかわる研究に適しており、データに密着した分析から独自の説明概念をつくり、それらによって統合的に構成された説明力に優れ、実践活用を促す理論である修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチが、本研究の手法として適していると判断した。

分析テーマは「児童養護施設退所者が自立していくプロセス」とし、分析焦点者は「社会に根ざして自立した生活を送っている児童養護施設退所者」とした。分析テーマに照らして、面接においてもっとも内容が充実していたと判断される対象者の逐語録から分析を始めた。分析テーマに基づき関連箇所に着目し、それを一つの具体例(バリエーション)とし、その意味を解釈し定義とした。さらにその定義から概念名を生成した。バリエーションの抽出から概念生成には分析ワークシートを用いた。これらの分析を踏まえつつ、最後の事例まで同様に分析した。生成した概念と他の概念との関係を比較検討しながら、カテゴリーを生成した。カテゴリー相互の関係から分析結果を結果図としてまとめた。続いて、生成した概念とカテゴリーで分析結果を文章化し、ストーリーラインとした。

分析においては、心理・福祉学の研究者及び児童養護施設の心理療法担当職員と討議し、妥当性・信頼性の確保に努めた。

### 2.4 倫理的配慮

対象者には、面接を録音すること、個人が特定できないようにして分析を行うこと、論文作成後はデータを破棄することを文書及び口頭で説明し

了承を得た。その際、各対象者に同意文書を記入していただいた。なお、本研究は聖徳大学倫理審査委員会の承認を得た。

### 3 結果

分析の結果、30概念と9カテゴリーを生成した(表1)。結果図は図1に示した。本研究において、以下のようなストーリーラインが考えられた。なお、【 】はカテゴリー、〈 〉は概念、『 』は定義を示す。また、児童養護施設退所者(以下退所者)が児童養護施設(以下施設)に入所中の状況について記述する際は、退所者を「子どもたち」とする。

#### 3.1 ストーリーライン

親の行方不明、親の疾病や離婚等による養育困難、あるいは親による虐待等により、家庭で親と共に暮らせなくなった子どもたちが施設に入所すると、これまでと異なった環境に置かれ、〈1.居場所の不安定さを抱えて生活する〉ことになる。そのような中で、施設の内外において〈2.他者と比べて不満を持つ〉ことや、施設内での〈3.集団生活の軋轢をやり過ごす〉ことを強いられるというような【施設生活を体験する】。

そのような施設生活の日々の中で、〈4.担当職員が変わらないことにより、安定感を得る〉ことができ、入所以前の過酷な生活や現在の生活に対する不満、さらに将来に対する不安等を整理がつかないままに無自覚に表現するようになる。つまり、〈5.満たされない思いを問題行動という形で表出する〉。これは、担当職員は変わらないという安定感の下に表すことができる試し行動であるともいえる。それらの行動を職員が受け止めてくれること等を通して、〈6.職員との関係が深まる〉。続いて〈7.あるがままを受け入れてくれ独占できる担当職員の存在を認識できる〉ようになる。これらの体験を通して、権威や権力によって大人に従うのではなく、自分を大切に思ってくれる、信じられる大人との信頼関係の中で主体性を獲得していくというような〈8.職員との関係性を尊重する〉中で子どもたちは育っていく。このように、職員と子どもが生活を共にしていくことを通して、子どもたちは【職員との関係を築く】ことができ、職員との信頼関係を基に成長していく。

やがて中学卒業が近づくと、就職か、進学かを選ばなければならないなどの〈9.置かれた現実に進路選択を迫られる〉。高校に進学したいため

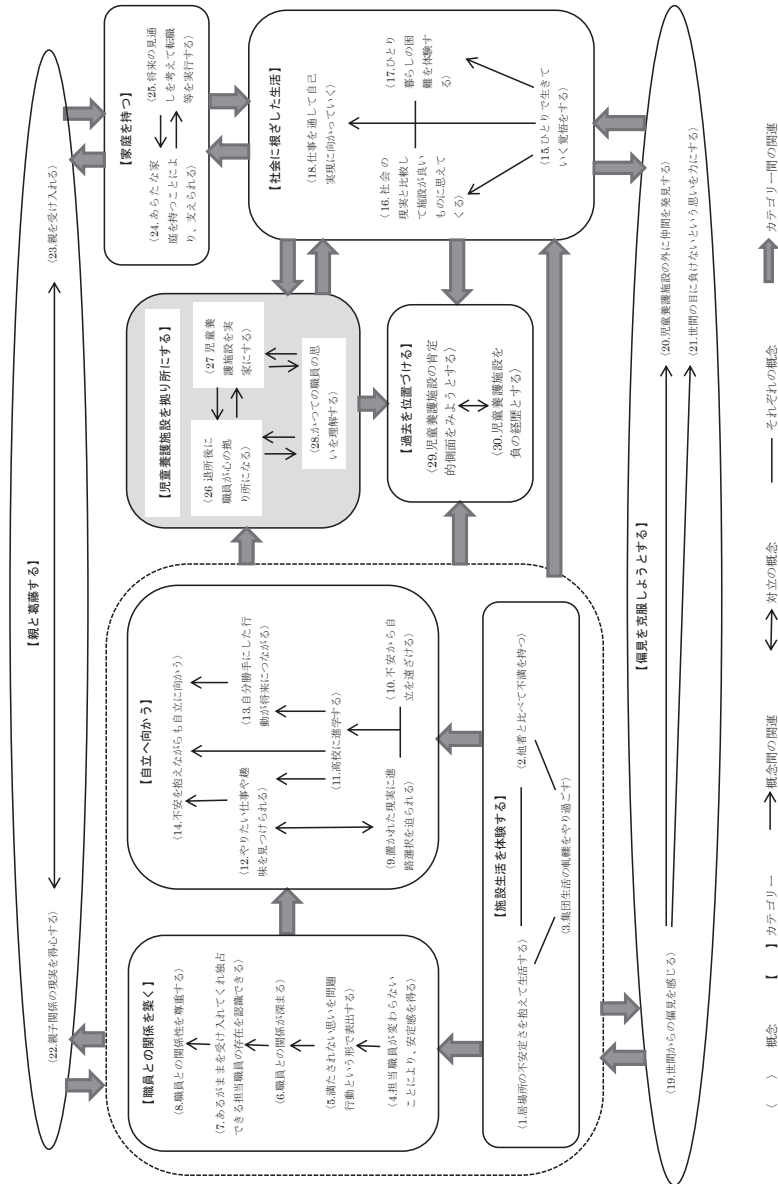


図1 児童養護施設退所者が自立していくプロセス

児童養護施設退所者が自立していくプロセスに関する研究

表1 概念とカテゴリー

カテゴリー	概念	定義
施設生活を体験する	1. 居場所の不安定さを抱えて生活する	児童養護施設が自分の居場所になっていないと感じること
	2. 他者と比べて不満を持つ	他者と比べて、自分の境遇に不満を持ち続けながら生活していること
	3. 集団生活の軋轢をやり過ごす	集団生活の中で起こるさまざまな軋轢に流されていくこと
職員との関係を築く	4. 担当職員が変わらないことにより、安定感を得る	自分の担当を明確に認識でき、その人が変わらずに自分の担当でいてくれるということで心が落ち着くこと
	5. 満たされない思いを問題行動という形で表出する	年少児をいじめることや悪いとわかっていることをすることによって、将来への不安や満たされない思いを無意識のうちに表現していた時期があったこと
	6. 職員との関係が深まる	何をしても児童養護施設の職員が受け止めてくれることを通して職員を信用できるようになること
	7. あるがままを受け入れてくれ独占できる担当職員の存在を認識できる	集団の中で自分だけを受け止め、自分のことだけを考えてくれる担当の存在に心強さを感じながら児童養護施設で生活できること
	8. 職員との関係性を尊重する	大人の言うことを聞くのは権威や権力によってではなく、信頼関係によってであること
	自立へ向かう	9. 置かれた現実に進路選択を迫られる
10. 不安から自立を遠ざける		児童養護施設を出て1人で自立することに大きな不安を感じる
11. 高校に進学する		高校進学が当たり前という環境の中で高校に進学できること
12. やりたい仕事や趣味を見つけられる		児童養護施設在籍中に様々な経験を積むことにより、自分の好きなことや適性を見つけることができ、進路につながる
13. 自分勝手にした行動が将来につながる		児童養護施設に在籍しながらその枠から飛び出して自由に自分中心の生活を楽しんだことで、経験の幅が広がること
14. 不安を抱えながらも自立に向かう		経験を通して仕事への不安が減少し、自立への意識が高まっていくこと
社会に根ざした生活	15. ひとりで生きていく覚悟をする	生きていくためには働いて金銭を得なければならないと自覚し、それに対して精一杯の心構えを持っていること
	16. 社会の現実と比較して施設が良いものに思えてくる	ひとりで生きていくという経験をしたことによりこれまで不満を抱いていた施設生活がありがたいものに思えてくること
	17. ひとり暮らしをしていく際に、後ろ盾のない不安からさまざまな困難に出会うこと	ひとり暮らしをしていく際に、後ろ盾のない不安からさまざまな困難に出会うこと
	18. 仕事を通して自己実現に向かっていく	仕事を生活のためにだけするのではなく、精神的な価値を見出したいという意識を持つが、価値を見出すことができた
偏見を克服しようとする	19. 世間からの偏見を感じる	児童養護施設の部外者からの施設で生活している者への差別意識を感じること
	20. 児童養護施設の外に仲間を発見する	人間関係の広がりの中で、自己の環境を捉え直すことができるようになること
	21. 世間の目に負けないという思いを力にする	児童養護施設で生活していることや出身者であることを意識して、より良く振る舞おうと努力すること
親と葛藤する	22. 親子関係の現実を得心する	親に対してないものねだりをしていたことから現実と直面して乗り越えられるようになること
	23. 親を受け入れる	わが子ができたことにより、親の気持ち理解できるようになっていくこと
家庭を持つ	24. あらたな家庭を持つことにより、支えられる	あらたに築いた家庭で生活していくことにより配偶者や子どもと共に成長していくこと
	25. 将来の見通しを考慮して転職等を実行する	生活するために金銭を得ることに必死だった時期から労働条件や将来の見通しを考えられるようになっていくこと
児童養護施設を拠り所にする	26. 退所後に職員が心の拠り所になる	退所後に、心から頼れると思うことができる職員が児童養護施設に存在していることを信じられること
	27. 児童養護施設を実家にする	退所後に何年たっても児童養護施設が自分の居場所であってほしいと願うこと
	28. かつての職員の思いを理解する	成長してから、かつて児童養護施設の職員がどのような思いでかわってくれていたのかわかること
過去を位置づける	29. 児童養護施設の肯定的側面をみようとする	過去を自衛したいという思いから、児童養護施設の生活を、好感を持って思い出すこと
	30. 児童養護施設を負の経歴とする	児童養護施設が悲惨な家庭生活からの避難場所になり得ず、負の経歴として残ること

はなく、施設に残りたいために進学を選ぶ、〈10. 不安から自立を遠ざける〉という選択も含めて、多くの子どもたちは〈11. 高校に進学する〉。そこで経験の幅を広げ、〈12. やりたい仕事や趣味を見つけられる〉ようになったり、施設のルールを破って、門限を過ぎても友人と遊ぶなどの〈13. 自分勝手にした行動が将来につながる〉というような体験をしていき、〈14. 不安を抱えながらも自立に向かう〉。つまり、施設を退所して会社の寮に入る、あるいはアパートを借りてひとり暮らしをする等の【自立へ向かう】のである。

そこで退所者は、生きていくためには何があっても働かなければならないという〈15. ひとりで生きていく覚悟をする〉。このとき、退所者は入所中に施設に対して多くの不満を抱えていたにもかかわらず、〈16. 社会の現実と比較して施設が良いものに思えてくる〉。すなわち、退所後の生活が退所者にとっては非常に大変なものであるということであろう。そのような中で、施設で集団生活をしてきたため孤独に耐えられない、金銭感覚が身につけていないためお金のやりくりができない、保証人を頼める人がいないなどの〈17. ひとり暮らしの困難を体験する〉。続いて、ひとりで生きていくためにはどんな仕事でも懸命にやらなければならなかった時期から、仕事を生活のためだけにするのではなく、精神的な価値を見出したいと思うようになり、〈18. 仕事を通して自己実現に向かっていく〉退所者もある。これらが、退所者が【社会に根ざした生活】をするときの状況である。

また、退所者は、入所中から退所後においても、何らかの形で〈19. 世間からの偏見を感じる〉が、〈20. 児童養護施設の外に仲間を発見する〉ことや、〈21. 世間の目に負けないという思いを力にする〉ことにより、【偏見を克服しようとする】。

さらに、離れて暮らさなければならなくなった親に対しての思いを、長い期間をかけて〈22. 親子関係の現実を得心する〉ことにより、乗り越えられるようになる。あるいは、退所者自身が親になるという経験を通して、〈23. 親を受け入れる〉ことができる場合もある。いずれにせよ、【親と葛藤する】ことは、退所者にとって大きな課題となっていく。

このように、様々な形で親との関係を見限り、あるいは親を受け入れ、または整理がつかない状態であるにしても、退所者は自分自身の【家庭を持つ】。つまり、〈24. あらたな家庭を持つことにより、支えられる〉のである。配偶者に支えられ子どもと共に成長していく中で、〈25. 将来の見通



しを考えて転職等を実行する)ようになっていく退所者もいる。

このような退所後の状況の中で、〈26. 退所後に職員が心の拠り所になる〉ことや、〈27. 児童養護施設を実家にする〉ことを通して退所者は支えられている。さらに退所者の成長に伴い、〈28. かつての職員の思いを理解する〉ようになる。退所者が自立していくに当たり、【児童養護施設を拠り所にする】ということが重要であると考えられる。

また、退所者は自分が施設で生活してきたことの【過去を位置づける】。多くの施設退所者からは、〈29. 児童養護施設の肯定的側面をみようとする〉語りがなされたが、〈30. 児童養護施設を負の経歴とする〉退所者がいたことも特記したい。

## 3.2 生成したカテゴリーと概念

### 3.2.1 施設生活を体験する

【施設生活を体験する】は、〈1. 居場所の不安定さを抱えて生活する〉〈2. 他者と比べて不満を持つ〉〈3. 集団生活の軌轍をやり過ごす〉の3概念で構成される。

〈1. 居場所の不安定さを抱えて生活する〉は、『児童養護施設が自分の居場所になっていないと感じること』と定義した。バリエーションは、「ここがおれの家だと、帰る場所はもうここしかないので、特にいやでも、でもここにずっといたときは、さっさと卒業したいとは思ってたすね、やっぱり」などがあった。

〈2. 他者と比べて不満を持つ〉は、『他者と比べて、自分の境遇に不満を持ち続けながら生活していくこと』と定義した。バリエーションは、「小学校2年生ぐらいのときからもう人と比べるようになってちゃって、まわりの人となんか、なんで自分だけこうなんだろうというのが、やっぱり一緒に遊んでいる友達とか長く一緒にいると余計に、なんかあれ持ってた、これ持ってたとか、うらやましかったりとか、というので、ここにいてなんで私だけこうなんだろうというのはあって、それで職員に当たったりとか、物に当たったりとか、というのはありましたね」などがあった。

〈3. 集団生活の軌轍をやり過ごす〉は、『集団生活の中で起こるさまざまな軌轍に流されていくこと』と定義した。バリエーションは、「あと、よくいじめられたことぐらいしか覚えてないな。(中略) いやだったけど、おれも結局同じことするようになるんだから、自然の流れでしょう、摂理

としては、そのときいやだったけど、同じことしてんだから。だから早く大きくなりたいなというのがそこから始まるんだよね、きっと。大きくなればいじめられなくなるし、立場上になる。でも下の子がどんどん入ってくるから、学校と一緒だよ、学校もそうだから。だから、自然の流れだよ。今はそういうことしてないけど、自然の流れだよ」などがあつた。

### 3.2.2 職員との関係を築く

【職員との関係を築く】は、〈4. 担当職員が変わらないことにより、安定感を得る〉〈5. 満たされない思いを問題行動という形で表出する〉〈6. 職員との関係が深まる〉〈7. あるがままを受け入れてくれ独占できる担当職員の存在を認識できる〉〈8. 職員との関係性を尊重する〉の5概念で構成される。

〈4. 担当職員が変わらないことにより、安定感を得る〉は、『自分の担当を明確に認識でき、その人が変わらずに自分の担当でいてくれるということで心が落ち着くこと』と定義した。バリエーションは、「団体（大舎制）のとき、生活してたときって、自分の担当がだれだかというのがわかっていないです。わかっていない。そのときAさんだったじゃないですか。でも自分の中では、Aさんが担当だというイメージがなかった、団体のときって。担当が、そう担当が、ある意味きゅっとせばまって、その人数（小舎制）でやったとき、はつきり、あ、Aさんが自分の担任、担当なんだと思って、そこからたぶん、好きになったのもある。はつきり、そこで、そう考えると、団体のときのってより、こっち（小舎制）の方がすごく良かった、落ち着いた気がする。小さい方がはつきりわかった、はつきりしたから、そう考えると、そうすね。こっち（大舎制）は、なんか、みんなで団体してワイワイという感じだけど、はつきりだれがどうみたいのは、はつきりしてなかったから、ただ普通に団体で、みんなと一緒に生活しているみたいな感じが強かった気がしますね。こっち（小舎制）はもうどっちかというとほんとにもう、はつきり絆じゃないですけど、そういう、そうすね」などがあつた。

〈5. 満たされない思いを問題行動という形で表出する〉は、『年少児をいじめることや悪いとわかっていることをすることによって、将来への不安や満たされない思いを無意識のうちに表現していた時期があつたこと』と定義した。バリエーションは、「あつたかもね、その当時はね、きっとそう

いうのもね、あったかな、あったのかな、ちょうど小学校4年生ぐらいでしょう？ 確かあのときはもうひどかったからな、(中略) なんでもやってたからな、その感覚があったのかどうかわかんないけどね、その当時に。なんでもやってたからね、悪いとわかりながら。その感覚がわかんない、わかんない、もしかしたらあったのかもね……きつとね」などがあつた。

〈6. 職員との関係が深まる〉は、『何をしても児童養護施設の職員が受け止めてくれることを通して職員を信用できるようになること』と定義した。バリエーションは、「言ったら自分の寂しいときに一番近くにいてくれたからね。うん、すごいなと思うね。信用させられたね、ハハハハハ。好きにさせられちゃったの、すごい、だからすごいなと思うね」などがあつた。

〈7. あるがままを受け入れてくれ独占できる担当職員の存在を認識できる〉は、『集団の中で自分だけを受け止め、自分のことだけを考えてくれる担当の存在に心強さを感じながら児童養護施設で生活できること』と定義した。バリエーションは、「職員を独占したかったです、アハハハハ。あの、こう、職員の方は、面倒を見る人(子どもが)何人かいるじゃないですか。その中でも平等じゃないといけないじゃないですか。でも自分は特別視してもらいたい、その中でも独占したい。そこですかね、強いて言うなら」などがあつた。

〈8. 職員との関係性を尊重する〉は、『大人の言うことを聞くのは権威や権力によってではなく、信頼関係によってであること』と定義した。バリエーションは、「おまわりが来ても、園長に怒られても、自分が興味ない相手だから、警察でも、園長でも。担当にちゃんと怒られた方がたぶん聞くよね。もうどうでもいいから、おれのこと何も知らない人間に何言われても、全然どうでもいい。あんまり信用するタイプじゃなかったから、やっぱり、親がおれらをいやで施設に入れたんだと思ってるから、理由はわかんないけど。でもだから別に他の人が何言っても興味ないし、でもこの自分が好きな先生というか、担当の言ってることは聞いとかないな。ちゃんと言うこときくかは別として、いったんこう入れられるというか、そんな感じかな」などがあつた。

### 3.2.3 自立へ向かう

【自立へ向かう】は、〈9. 置かれた現実に進路選択を迫られる〉〈10. 不安

から自立を遠ざける)〈11. 高校に進学する〉〈12. やりたい仕事や趣味を見つけれられる)〈13. 自分勝手にした行動が将来につながる)〈14. 不安を抱えながらも自立に向かう)の6概念で構成される。

〈9. 置かれた現実に進路選択を迫られる)は、『自分がやりたいことや適性からではなく、児童養護施設に在籍できるようにすることや金銭を得ることを目的として進路を選ぶこと』と定義した。バリエーションは「やりたいことも見つけられないままだったし、その将来のビジョン的なものも、夢とかもなかったから。(中略)一番がその働かないとお金もらえないし、お金ないと生活できないという考えだから」などがあつた。

〈10. 不安から自立を遠ざける)は、『児童養護施設を出てひとりで自立することに大きな不安を感じる』と定義した。バリエーションは「高校に上がらなかつたら、自立しなきゃいけないじゃないですか。自立するのがいやだから、ウフフフ、施設に残って学校に行っていた方が自分の中で幸せだと、ウフフフ、そこですよ、高校入った理由は、入らなくても正直良かった。変な話、高校行きたい、勉強したいという気持ちはそんなになかつたかも知れない、そんなまったく。残りたい、施設に残りたいというのがすごく強かつた」などがあつた。

〈11. 高校に進学する)は、『高校進学が当たり前という環境の中で高校に進学できること』と定義した。バリエーションは、「あんまりなんか、高校行かなきゃ出なきゃいけないというイメージがなくて、高校に進めるのが当たり前だと思つていて、行つていない人はいない、自分のその学力に応じて行きたい高校に行くというような感じで、高校卒業してない人はあんまり、途中でやめない限りは、みんな入学しているというのがあつて、普通にみんな高校に行つてましたね」などがあつた。

〈12. やりたい仕事や趣味を見つけれられる)は、『児童養護施設在籍中に様々な経験を積むことにより、自分の好きなことや適性を見つけることができ、進路につながる』と定義した。バリエーションは、「農業高校に行つて、その中で畑の実習とか、農工機、機械の実習とかつて、そのときにはじめて機械の実習でエンジンとか、トラクターのエンジンとか触らしてもらつて、そこでなんか面白いなと思つて。今なんか整備士で働いていて、そこで触らなかつたら今の職にはついてないかなと思つて」などがあつた。

〈13. 自分勝手にした行動が将来につながる)は、『児童養護施設に在籍

しながらその枠から飛び出して自由に自分中心の生活を楽しんだことで、経験の幅が広がること』と定義した。バリエーションは「その外出時間守んなかったからこそ、いろんな友達と遊べたし、友達もふえてるし、それでも悪いことだったりいいことだったりいろいろあったけど、まあそうだね、守んなかったからこそ良かったぶんはすごい、たぶん守ってたときより全然多いと思う。だから、それで良かったんじゃないかなというのは、そっちの方が良かったというのは思うね」などがあつた。

〈14. 不安を抱えながらも自立に向かう〉は、『経験を通して仕事への不安が減少し、自立への意識が高まっていくこと』と定義した。バリエーションは、「学校は結局、単位が足りない、出席回数も全然行ってなかったので、留年するか、退学するかみたいな、2年生のときに。で、退学しましたね。でも、そのときに、じゃ、仕事をちゃんとしようというふうに意識した気はしますね、そのときに」などがあつた。

### 3.2.4 社会に根ざした生活

【社会に根ざした生活】は、〈15. ひとりで生きていく覚悟をする〉〈16. 社会の現実と比較して施設が良いものに思えてくる〉〈17. ひとり暮らしの困難を体験する〉〈18. 仕事を通して自己実現に向かっていく〉の4概念で構成される。

〈15. ひとりで生きていく覚悟をする〉は、『生きていくためには働いて金銭を得なければならないと自覚し、それに対して精一杯の心構えを持っていること』と定義した。バリエーションは、「おれはもう、前からそうだけど、中学校のときからそうだけど、15歳から働くというのは決めてたし、ひとり暮らししたいというのもあつたし、でもひとり暮らししたら失敗はできないと、だれも助けてくれないから自分でやるしかない、そう決めてやってきているからね」などがあつた。

〈16. 社会の現実と比較して施設が良いものに思えてくる〉は、『ひとりで生きていくという経験をしたことによりこれまで不満を抱いていた施設生活ありがたいものに思えてくること』と定義した。バリエーションは、「園を出るまでは、園なんかにいなくてもいいやと思ってたけどね。そこの幸せとか分かんないから、社会に出てないから。うん、でも、社会に出てみて、うわっ、ずっと園がいいやと思ったね、へっへっ。飯は出てくるしさ、寝るとこはあるし、風呂は入れるし、こんなとこねえんだろう

なっているのは出てから気づいたけどね。うん、そりゃみんな思うんじゃないの、ひとり暮らしするようになって」などがあつた。

〈17.ひとり暮らしの困難を体験する〉は、『ひとり暮らしをしていく際に、後ろ盾のない不安からさまざまな困難に会うこと』と定義した。バリエーションは、「中学校卒業してすぐおれも東京行っちゃったので、でも、行った瞬間、ほんと寂しいですね。集団生活してたじゃないですか、いきなり外に1人でぼつんと住んで、とてもじゃないけど耐えられなかったですもんね、寂しくて」などがあつた。

〈18.仕事を通して自己実現に向かっていく〉は、『仕事を生活のためだけにするのではなく、精神的な価値を見出したいという意識を持つか、価値を見出すことができたことと自覚すること』と定義した。バリエーションは、「そのやりたいこと見つからないまま出ちゃったから、貯金もある程度してたんだけど、それで仕事1回やめようとした時期があつて。そのなんかやりたいこと見つけてから、それにすごい頑張りたかったなというのが今でも後悔してて、友達に今でも遅くないとか言われるんだけど、生活もかかっているから、だから、自分がほんと困ったのは、やりたいことができないというか、やらされちゃってる感で仕事やってた時期があつたから」などがあつた。

### 3.2.5 偏見を克服しようとする

【偏見を克服しようとする】は、〈19.世間からの偏見を感じる〉〈20.児童養護施設の外に仲間を発見する〉〈21.世間の目に負けないという思いを力にする〉の3概念で構成される。

〈19.世間からの偏見を感じる〉は、『児童養護施設の部外者からの施設で生活している者への差別意識を感じとること』と定義した。バリエーションは、「その施設に育ったというだけで、まあ、悪いレッテルを張られるじゃないけど、普通の子じゃないってたぶん思う人の方が、たぶん多いんですよ。私も最初に、一番最初に就職をするときに、面接の人が3人いて、自分で面接、練習した通りにやったんですけど、やっぱりその面接官が言った言葉は10年前ですけど、今でも覚えていて、『あなた施設で育ったの？施設で育ったわりには元気だね』と言われて、それはいい意味に捉えればいいんですよ。でも私は悪い意味で捉えちゃって、施設で育ったわりにはってなんだよって思っちゃって、何が悪いのって思っ

結局やっぱりその世間の人たちは施設をそういうふうに見てるんだと、そこで改めて思っ、もう心の中ではもう就職なんかしない、文句言っ、やろうと思っ、ずっと握り拳をつくっていたんですけど、やっぱりそこは社会に出るとい、う一歩だったからぐっ、とこらえて、でも今でも忘れられないですね、あの面接官の言葉は」などがあつた。

〈20. 児童養護施設の外に仲間を発見する〉は、『人間関係の広がりの中で、自己の環境を捉え返すことができるようになること』と定義した。バリエーションは、「なんかまわりも友達とかで中学入っ、てから片親だつたりとかそういう友達が多かつたから、お母さんが毎日家にいない状況で夜ご飯とかも妹と友達が一緒に作つたりしてとか。だからそういう友達とかに比べたら、そういうちゃんとした毎朝衣食住もちゃんとしていて、そのそういう人たちと比べたら全然こっちの方がましだなとい、うか、思っ、てきたから」などがあつた。

〈21. 世間の目に負けないという思いを力にする〉は、『児童養護施設で生活していることや出身者であることを意識して、より良く振る舞おうと努力すること』と定義した。バリエーションは、「でも、一番そこらへんで迷つたのは、成人式どうしようかなあとい、うのがあつて。成人式、みんな行くよなあ、でも、お金ないなあと思っ、ながら、欲しいものを我慢して、毎月積み立てして、なんかやっば、どっかでプライドがあつて、あの子は施設にいたから成人式来れないんだなあと思われ、たくないとい、うのもあつたし、その教習所もそうだし、何でもその施設にいたからとい、われるのがすごいやで」などがあつた。

### 3.2.6 親と葛藤する

【親と葛藤する】は、〈22. 親子関係の現実を得心する〉〈23. 親を受け入れる〉の2概念で構成される。

〈22. 親子関係の現実を得心する〉は、『親に対してないものねだりをしていたことから現実に直面して乗り越えられるようになること』と定義した。バリエーションは、「6～7年ぶりに親父と会つたのかな。17、19か、19だ。成人の前だもん。そう、10年ぶりに会つたんですよ。10年ぶりに会つて、一発ぶん殴つてやっからと思っ、ていたんですよ、気持ちは。そしたらおれよりはるかに小さいんですよ。身長160あるのかとい、うくらい小さくて、細いんですよ。うわ、こんな細かつたんだおれの親父と思っ

て、小さくて、殴んなかったですけど。いや、こんな人だったんだなと思って、殴らず。ごめんな、とは言っていましたけど。別にいいよ、気にしなくて、と言って、それやってくれたから今のおれあるしって」などがあった。

〈23. 親を受け入れる〉は、『わが子ができたことにより、親の気持ちが理解できるようになっていくこと』と定義した。バリエーションは、「(自分の子どもができてから) よっぽどの理由があったなあと思っちゃうもんね。そうやって離れて生活しなくちゃいけないわけじゃん、そうだよなって、しょうがなかったなって。そう思うとそのとき入れやがってとか、親に楯突いて文句ばっか言ってたけど、母ちゃんよく我慢してたなあと思うしね。別に理由だっておれらに、あんたたち好きで入れたわけじゃないよって言えばいいだけなのに、そんなこと一言も言わないでさ、ごめんね、ごめんねと聞いてくれてただけでさ、すごいよね、たいしたもんだよ、大人ってすげえよ、ほんと思う」などがあった。

### 3.2.7 家庭を持つ

【家庭を持つ】は、〈24. あらたな家庭を持つことにより、支えられる〉〈25. 将来の見通しを考慮して転職等を実行する〉の2概念で構成される。

〈24. あらたな家庭を持つことにより、支えられる〉は、『あらたに築いた家庭で生活していくことにより、配偶者や子どもと共に成長していくこと』と定義した。バリエーションは、「子どもが生まれてからはとにかく、正しくありたいというか、子どもにとって、子どもから見たときに、正しい父親像でありたいなということは、すごく思いますね。僕なんてまだ子育ての何たるかも全然わかってないですけど、でもやっぱり自分みたいな子を作ってはいけないなというのはすごく思うし、子どもって、こんなにかわいいんだなって、というのは、ほんとに日々感じてますし」などがあった。

〈25. 将来の見通しを考慮して転職等を実行する〉は、『生活するために金銭を得ることに必死だった時期から、労働条件や将来の見通しを考えられるようになっていくこと』と定義した。バリエーションは、「子どもができて、じゃ、正社員になろうと思って、そうですね。それまでも結構、なんだかんだ不安でしたね、はっきりしなかったところが。そこでもう正社員になって、引っ越しもしたりとかして、わざわざ正社員になるために免



許も取ったりとかして」などがあった。

### 3.2.8 児童養護施設を抛り所にする

【児童養護施設を抛り所にする】は、〈26. 退所後に職員が心の抛り所になる〉〈27. 児童養護施設を実家にする〉〈28. かつての職員の思いを理解する〉の3概念で構成される。

〈26. 退所後に職員が心の抛り所になる〉は、『退所後に、心から頼れると思うことができる職員が児童養護施設に存在していることを信じられること』と定義した。バリエーションは、「おれが良かったのはただその、おれのことを信じると言ってくれて、担当の人がね、おれのことをちゃんと見ててくれたから、今出たあとでもあの人と話したいなとか、なんか困ったら絶対相談できる人でいることは間違いないなと思う」などがあった。

〈27. 児童養護施設を実家にする〉は、『退所後に何年たっても児童養護施設が自分の居場所であってほしいと願うこと』と定義した。バリエーションは、「死のうが何だろうが、別にかまわないですね、親父、おふくろは、ほんとに。逆にこっちの先生たちの方が、亡くなった方が悲しいですね。やっぱり、記憶もこっちの方が残っているじゃないですか。子どもの頃より、一緒にどこに行ったとか、キャンプやったとか、スキー行ったとかしたんで、やっぱ、思い出はこっちの方が、こっちの方のお世話になった先生たちが亡くなっちゃうとやっぱ痛いですよ。実の母親とか死んでも……かな。大事にしろとは言われるんですけどね。や一、実の母親たちを大事にするなら、先生たち大事にするよとか思いつつ」などがあった。

〈28. かつての職員の思いを理解する〉は、『成長してから、かつて児童養護施設の職員がどのような思いでかかわってくれていたのかがわかること』と定義した。バリエーションは、「何をしてくれたとかはその当時は全然思っていないなあ、うん、思っていないと思う。やっぱ今とそのときの気持ちって全然違うから、あんときよくしてくれたんだなって今わかるけど、そのときはもうやりたいからやって、やってくれる、やったぜぐらいで、ありがとうとかって、あんまり思っても言えなかったよね」などがあった。

### 3.2.9 過去を位置づける

【過去を位置づける】は、〈29. 児童養護施設の肯定的側面をみようとする〉と〈30. 児童養護施設を負の経歴とする〉の2概念で構成される。

〈29. 児童養護施設の肯定的側面をみようとする〉は、『過去を自得したいという思いから、児童養護施設の生活を、好感を持って思い出すこと』と定義した。バリエーションは、「これはいやだったか。うーん、今聞かれると、全然難しいね。今聞かれてもいやなことなんかひとつもなかったと思っちゃうけど、当時はほら、園にいたくないと言って、どっかに出てたりしてたから。何がいやだったか、わかんない。わりとおれ、自由にさせてもらってたから、アハハハハ、アハハハハ。何がいやか、難しいな、何もいやじゃなかったけどな、別に、うーん」などがあつた。

〈30. 児童養護施設を負の経歴とする〉は、『児童養護施設が悲惨な家庭生活からの避難場所に成り得ずに、負の経歴として残ること』と定義した。バリエーションは、「僕は結構残っていますね。気持ちの中で、常にとは言わないですけど、やっぱりその負の部分がすごい、自分のつくる中ですごい残っている気がしますね、(施設に)いたことというのが」などがあつた。

## 4 考察

「社会に根ざして自立した生活を送っている児童養護施設退所者」9名に、児童養護施設入所中から退所後の生活について、半構造化面接を行った結果、多くの退所者が、施設入所中に特定の職員(以下担当)との関係を築き、退所後にもその関係を続けていたことが明らかになった。退所者からは、担当との特別な関係についての語りが多く聞かれた。つまり、どの子も平等なのではなく自分だけが独占できる関係を求めることができた、(交代勤務なので)毎日自分の担当といるわけではないが「自分にはこの人がいる」と思える安心感があつた等である。このようにして築かれた信頼関係が成長の基盤となり、自信となって自立へと向かっていったと考えられる。

しかし、退所者の中には、自分は担当とフィーリングが合ったが、同じ職員に担当されている子どもの中でどうしてもその職員が嫌だという子もいたという語りもなされている。このような状況に対しては、岡本晴美(2010)が「子どもたちは、場合によって、職員を選ぶことができるよう

になり、(中略)これまでの逃げ場がなかった状況から『選択』できる環境が整ってきたのである」(岡本 2010 : 8)と担当制からチーム制への切り替えを評価している。また、小木曾宏・梅山佐和(2012)は「子どもと職員の関係が不良になり容易に修復が難しい場合に転寮できるシステムを持つことも大きな意味がある」(小木曾・梅山 2012 : 110)としている。これに対して、内海新祐(2014)は、「緊密な関係は、良い時は良い。だがひとたびこじれると身動きが取りにくくなることも多い。その修復も含めて生活だ、そこにこそ醍醐味がある、というのは確かにそうだが、そこにたどり着くまでが大変である」(内海 2014 : 23)としている。職員は確かに大変であるが、その大変さを乗り越えて関係を続けていった先に退所者の自立があることを、退所者たちの語りは示しているのではないだろうか。

また、退所者たちの語りの中に、前述した村井(2002)や櫻谷(2014)がいう主体性が多く感じとられた。〈9.置かれた現実に進路選択を迫られる〉の概念に現われているように、進路選択の際に、やりたいことや適性で選択するのではなく、置かれた現実に進路を規定されている退所者がいる。(12.やりたい仕事や趣味が見つけれられる)と、対極的な概念である。概念12.で語られているような経験を通して進路を選んでほしいと職員は考えて子どもたちに接しているが、概念9.で語られているようなことが現実である子どもたちもいる。しかしその場合でもそれが現実であると受け入れて、〈15.ひとりで生きていく覚悟をする〉というような自覚を持って、自分で決めたと思えることが重要であろう。それが〈18.仕事を通して自己実現に向かっていく〉や、〈25.将来の見通しを考えて転職等を実行する〉に繋がっていくと考えられる。

置かれた現実に進路を規定された退所者のうち、ある退所者は親族との交流が全くない状況で、早い時期から自分はひとりで生きていくと決めていたと、中卒で就職した思いを語っている。一方、同じような状況の別な退所者は、ひとりで生きていく自信がないので、高校に行きたいわけではないが、できるだけ長く施設に残りたいために進学したと語っている。選択の結果は対照的であるが、置かれた現実に進路を規定されているという選択の要因はどちらも同じであり、環境に規定されてはいるが、この退所者たちは自分の能力を見定めて自分の意思で選択している。

また、〈14.不安を抱えながらも自立に向かう〉では、高校を退学することになったが、アルバイト等の経験により、仕事をきちんとやろうと意識

できたプロセスが語られている。高校を退学することは否定すべきことではあるが、将来への見通しを立てることができた経験を基にあらたな一歩を踏み出そうとしていると考えれば肯定できるのではないだろうか。自分がやってきたことに自信と誇りを持てるかどうかということが重要なのだと考えられる。

内海 (2016) は、施設在籍の年齢制限について、「終わりを意識することで成長へのエネルギーが凝縮されて発揮されることがある」(内海 2016 : 127) とする一方、「一般以上に課題を抱え、一般より後ろ盾のない子どもを、一般より早く自立させねばならない。その矛盾の中で職員も子どもも焦り、形ばかりの『自立』に無理にこぎ付け、結果としてすぐに破綻してしまう」(内海 2016 : 128) 場合もあるとしている。ついで、「子どもの側に『よりよく生きたい』という思いがあってこそ可能になるのであろう。子どもにそう思ってもらうことが、児童養護施設における心理ケアの究極的な課題と考えられる」(内海 2016 : 130) としている。この「よりよく生きたい」という思いは、自分だけを受け止め、自分のことだけを考えてくれ、自分だけが所有しうる特定されたひとりの大人の存在が必要不可欠であり(野澤 1996)、それが入所から退所を経ても継続する担当職員との関係であることを、退所者たちの語りは示している。

このように、子どもと職員との継続する信頼関係を基盤として子どもは自立していくという考え方を基に、児童養護施設における養育論を構築し、自立支援の実践に繋げていくことが重要であろう。

## 謝 辞

本研究に快くご協力くださいました児童養護施設の施設長、職員の皆様、インタビューに真剣に応えてくださいました児童養護施設退所者の皆様に深く感謝申し上げます。

## 注

- 1) 現在ではアドミッションケア(施設入所前・施設入所時のケア)、インケア(施設入所中のケア)、リービングケア(施設退所前・施設退所時のケア)、アフターケア(施設退所後のケア)が児童福祉施設における自立支援の過程とされている(宮本 2013)。

## 文 献

- 伊達直利, 2002, 「児童養護施設とケアワーク」『世界の児童と母性』53:26-9.
- 長谷川真人, 2009, 「入所から社会生活を展望した自立支援の考え方と実践」全国児童養護問題研究会編集委員会編『児童養護と青年期の自立支援——進路・進学問題を展望する』ミネルヴァ書房, 79-87.
- 福島一雄, 1998, 「自立支援サービスの確立に向けて」『季刊児童養護』28(3):6-8.
- 木下康仁, 2003, 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い』弘文堂.
- 宮本秀樹, 2013, 「子どもの自立支援の過程」小木曾宏・宮本秀樹・鈴木崇之編『よくわかる社会的養護内容 第2版』ミネルヴァ書房, 70-1.
- 森田展彰, 2007, 「児童福祉ケアの子どもが持つアタッチメントの問題に対する援助」数井みゆき・遠藤利彦編著『アタッチメントと臨床領域』ミネルヴァ書房, 186-205.
- 村井美紀, 2002, 「『自立』と『自立支援』」村井美紀・小林英義編著『虐待を受けた子どもへの自立支援——福祉実践からの提言』中央法規出版, 131-52.
- 永野 咲・有村大士, 2014, 「社会的養護措置解除後の生活実態とデプリベーション——二次分析による仮説生成と一次データからの示唆」『社会福祉学』54(4):28-40.
- 野澤正子, 1996, 「1950年代のホスピタリズム論争の意味するもの——母子関係論の受容の方法をめぐる一考察」『社会問題研究』45(2):35-58.
- 小木曾宏・梅山佐和, 2012, 「児童養護施設の『小規模化』『家庭的養護』に関する一考察——児童自立支援施設の『小舎制』実践との比較検討の試み」『司法福祉学研究』12:101-18.
- 岡本晴美, 2010, 「児童養護施設形態と子どものケアに関する一考察——児童養護施設『遥学園』の取り組みを通して」『福祉教育開発センター紀要』7:1-15.
- 櫻谷真理子, 2014, 「児童養護施設退所者へのアフターケアに関する研究——社会的自立を支えるための施設職員の役割を中心に」『立命館産業社会論集』49(4):139-49.
- 青少年福祉センター, 1989, 『強いられた「自立」——高齢児童の養護への道を探る』ミネルヴァ書房.
- 庄司順一, 2007, 「社会的援助を必要とする子どもの自立支援」高橋重宏監修

- 『日本の子ども家庭福祉——児童福祉法制定60年の歩み』明石書店, 230-8.
- 高橋利一・岩崎浩三・池上和子, 2013, 『社会的養護の未来をめざして——東京都の児童養護施設等退所者の実態調査からの検討と提言』筒井書房.
- 玉井紀子・森田展彰・大谷保和, 2013, 「児童養護施設におけるリーピングケアに関する研究—生活担当職員を対象とした中高生のケアに関する調査」『子どもの虐待とネグレクト』15(1): 66-77.
- 谷口純世, 2011, 「児童養護施設における子どもへの自立支援」『愛知淑徳大学論集福祉貢献学部篇』1: 107-16.
- 内海新祐, 2014, 「児童養護施設の実態と課題」『そだちの科学』22: 21-5.
- , 2016, 「児童養護施設における思春期の心理的ケア——臨床心理士の立場から」『思春期青年期精神医学』25(2): 124-31.
- 山縣文治, 1989, 「児童養護におけるリーピング・ケア」『ソーシャルワーク研究』15(1): 44-50.
- , 2012, 「社会的養護と自立支援」武藤素明編著『施設・里親から巣立った子どもたちの自立——社会的養護の今』福村出版, 122-47.